郷土室だより

第91号
平成８年２月15日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電　話　3543－９０２５
刊行物登録番号 07-042

『中央区沿革図集』〔京橋篇〕できる！

三年がかり

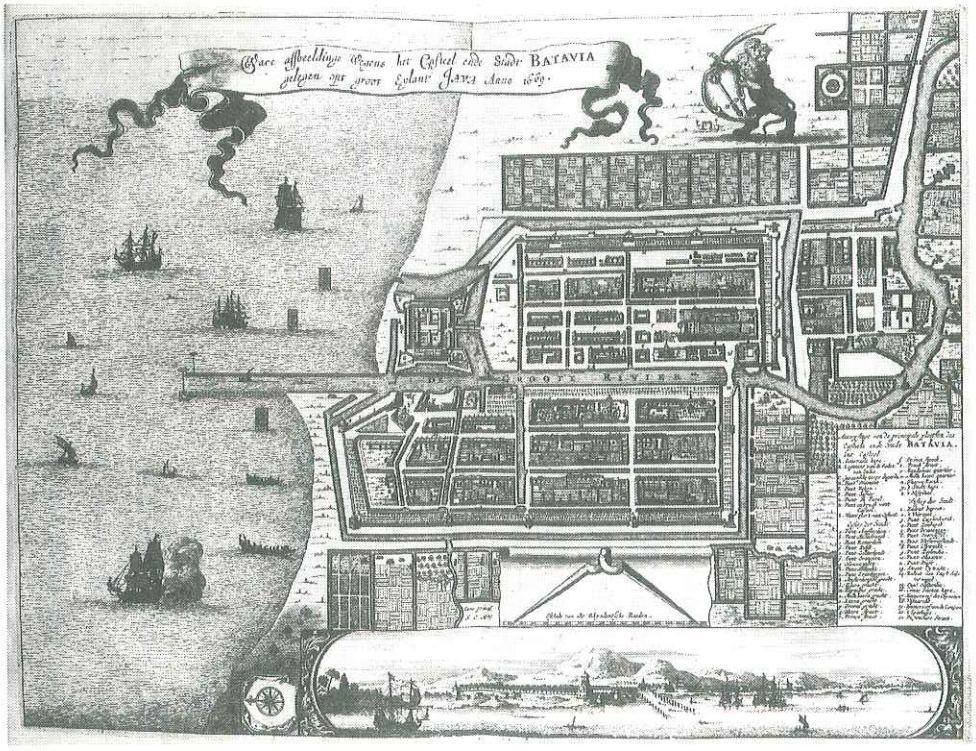
中央区教育委員会が３ヵ年計画で始めた区内の地図集の三冊目の、〔京橋篇〕がいよいよ出来上がり、近いうちにみなさんに見ていただけるようになりました。

〔月島篇〕（二〇二ページ）、〔日本橋篇〕（三六〇ページ）、そして今度の〔京橋篇〕が三九二ページ（いずれも大きさはＢ４版）ですので、読者の中から「まるで美術書を見るようだ」という、感想を頂いたことも二～三にとどまりません。

三つの柱

〔京橋篇〕は〔月島篇〕・〔日本橋篇〕のまとめのほか、つぎの点に特徴をもたせました。

一つは帆船交通時代の世界的港湾都市「江戸湊（みなと）」と、バタビア湊との比較です。この二つの湊がどのように似ているのか、またどのような共通点が



バタビアの“八町堀”〈京橋編〉より

あったのか ― つまり近世はじめの江戸のあり方を通じて、広く世界の都市への視点があることを紹介したことです。

このことは約三五〇年前の昔のことではなく、近代東京が海に進出した最初の場所が〔月島〕であり、以後約一世紀後にはかつての江戸前の海は跡片もなく埋め立てられつづけてきたこと。

さらに最近は外国の港湾都市のウォーター・フロントを手本に〝副都心〟を求めて巨大ないとなみが進みました。いまはそうした「ヴィーナスの誕生」の時の海の泡ならぬ、バブルがはじけてしばしの停滞期を迎えています。

しかしこの江戸という都市の水際はいつも、このような〝呼吸〟をくり返してきました。

このこともあって、都市江戸の最初の水際の有様を、表見返しの『江戸名所図屏風』をはじめ、いくつかの地図で、立体的に構成してみました。

都心の意味　二つ目は江戸～東京四百年の歩みの中で、改めて都心の意味を考えてみますと、確かに権力の中心は江戸城―皇居、そして国会にあるとしても、実際にその権力活動を支える経済的・文化的機能は、一貫して中央区の範囲にあったことも、またいうまでもありません。

しかしその「都市性」＝都市機能の数量的な、いいかえると具体的な把握がないまま、中央区の範囲は謳い文句として「経済・商業・文化の中心地」といった表現で済まされてきました。

〔月島・日本橋篇〕以来、『寛保（延享）沽券図』の復元作業などを通じて、明らかになったことは、少なくとも江戸から明治初期にかけては、沽券図の〝路線価格〟や「間小間」という〝税務調査〟の結果、東京がいちばん衰退した明治二年でも、東京全市の都市維持費用の約四三％を中央区の範囲が負担していました。

このように地図を通じた視覚で、中央区の都心性がわかるような工夫を、かなり意識的にまとめてみました。

最後の都心図　三つ目はおそらくこの『沿革図集』のような性質と構成の地図集は、これが最後のものになるかも知れないということです。

それは戦前までは都心に限らず土地・家屋に関する情報は公開的でした。この図集に取り上げたような土地台帳・地籍図には地主の氏名・住所・所有地の性格・面積と、いまの評価額に相当する「賃貸価格」まで明らかにしたものが民間から出版されていました。

戦後は税制の変革と個人のプライバシー保護のため、都市の基盤とそのコミュニティを〝無限責任〟的に支えてきた地主に関する情報は、固定資産税の縦覧制度だけになりました。

公的な機関の情報公開が建て前の社会で、歴史的には都市のコミュニティの骨格だった土地・家屋所有者に関する公的な情報が、一般市民にはほとんど得られないという現実があります。その意味で最後かも……という予想がするのです。

新しいメディア　〔京橋篇〕編集の最中の十一月下旬、ウィンドウズ95が日本で売り出され、それは情報のインターネット化に全く新しい可能性が開かれたといわれます。

しかしこうした状況の中で、都市のほんとうに基礎的な情報の時間的なつみかさなりは、はたして完全に保存されるのでしょうか。同時性を尊重することはもちろん

ですが、未来の原点としての現在の、これまでの事柄の時系列的な記録の必要性を、この図集の編集を通じて考えさせられました。

〔京橋篇〕掲載図一覧

1 武州豊嶋郡江戸庄図

1　部分図、2　全体図

3　江戸とバタビア

4　江戸八町堀の変遷

2 江戸方角安見図鑑で見た京橋

「宇田川橋より京橋まで」「京橋より日本橋」「鉄炮洲の湊」「れいがん嶋新堀」の四枚の地図で、中央区の海岸の有様をさぐるものです。

3 御府内沿革図書

幕府がつくった京橋地区の詳細図。いろいろな理由で町並みが変化した都度、その変化を新旧対照できる形に編集された地図。町名や町並み、大名・旗本の屋敷の変化など広く利用できる地図が七三枚。そのそれぞれに説明がつけられたものです。

4 延享沽券図（合計一三図）

〔日本橋篇〕では中央区民有形文化財である「寛保沽券図」を復元しましたが、〔京橋篇〕では、全く同時期（寛保四年二月に延享元年と改元）の沽券図一二図（国立国会図書館蔵）と、宝永七年の南伝馬町一～三丁目・南鞘町・南塗師町・松川町一、二丁目の図（都立中央図書館蔵）をとりあげました。読みやすくなるように工夫しましたので、中期の江戸の姿を具体的に知る資料として活用されることでしょう。

5 改訂江戸之下町復元図

原著の中から旧京橋区の部分を抜き出したもので、別に「天保十三年　南鍋町一丁目居住形態図」を加えました。本図の方の町人地の区割は、あくまで沽券図と同じく地主の所有区分だけですが、この南鍋町の図は九人の地主の地所に、実際に家屋が建っている状態を示したものです。

6 大区小区時代の京橋

明治六年の沽券図と、明治九年の東京全図。市区改正計画予定図もまじえて、江戸・東京の町の形が再現できるものです。

7 参謀本部陸軍部の東京図

この図は地上の事物を精細に図化したもので、行政区画図とは異なり、くわしく町の様子がわかる地図です。この図をたよりに銀座にあった井戸を調べた人もいます。

8 明治末期の京橋地区

明治四〇年の東京郵便局作成の地図にいろいろな情報をつけ加え、区内の町名の一覧表ものせたものです。

9 明治四五年　京橋区地籍地図

関東大震災前の京橋地区のもっとも詳細な地図だと考えられています。もちろん当時の町名・地番と各地所の面積との関係が中心です。

10 関東大震災関係図

今度は視野をひろげて、中央区を中心とする下町の状況も入れてあります。意外な所が焼け残ったり、焼けるにまかせた火流の動きなどが読みとれるものです。

また当時の海軍水路部（〔月

島篇〕参照）が、関東大震災当日からまる四ヵ月後の、大正十三年（一九二四）二月一日に発表した『大震後相模灘附近水深変化図』も紹介しました。

今から見て、その精度の問題はさておき、地震の巣であるこの海域の実測図は、いろいろなことを考えさせてくれます。

⑪帝都復興事業による変化

一面の焼野原に明治の市区改正以来の宿題であった近代都市化への再構築作業としての、復興区画整理が行なわれました。以来約七〇年間、東京都心の町並みはこの都市計画のまま現在に及んでいます。現代東京の原形をさぐる資料です。

⑫昭和七～一一年の火保図

〔月島篇〕・〔日本橋篇〕以来のおなじみの「火災保険地図」です。戦災前の家なみや居住者探しには最適な資料です。

⑬昭和二〇年代の火保図

⑫に続いて敗戦直後から復興途中の京橋地区の町なみ図です。所どころに占領軍の施設が見えるのも、時代の反映でした。

⑭昭和三七年頃の〔京橋地区〕

高度成長期のはじめの〔京橋地区〕の地図と航空写真です。いち早く銀座をグルリと囲む形に自動車専用道路が水路を埋めてつくられているのが特徴的でした。

⑮京橋よろず地図

京橋地区の①名所・旧跡・発祥地、②関東大震災前の京橋、③神社・仏閣・教会、④銀座地区の近代化（明治）、⑤祝祭都市京橋、⑥情報の〝るつぼ〟銀座、⑦京橋人国記、⑧消えた都電路線と停留所などで京橋の今・むかしをさぐるものです。

⑯中央区現状図

最後はおなじみの国土地理院の一万分の一図と航空写真です。

□解説の部

今度は完結篇でもありますので、江戸初期の中央区の海岸線の有様をはじめ、江戸期の地域区分などと芝居町との関係。

そして東京―日本の近代化の窓口になった京橋地区（銀座・築地・八町堀・霊岸島）などの変化を、具体的にとりあげてみました。

おわりに

『中央区沿革図集』〔京橋篇〕の完成で、〔月島篇〕・〔日本橋篇〕と計三冊がそろいました。

この三冊は中央区役所一階の公文書公開コーナー、京橋図書館、日本橋図書館、そして月島図書館で販売しています。価格はつぎのとおりです。

〔月島篇〕七千円、〔日本橋篇〕・〔京橋篇〕各一万二千円。

なお各図書館には閲覧用として備えつけてありますので、ぜひ、ごらん下さるよう、ご案内いたします。

お知らせ

第71回の東京を語る会を、次のように開催いたします。

演題　『江戸の木戸番小屋』
講師　北原亞以子氏（作家）
日時　平成8年3月16日（土）
　　午後2時～3時30分
会場　中央区京橋図書館鑑賞室